

13. アルコール依存症のIMP-SPECT所見

松田 博史 久田 欣一 (金沢大・核)
 刑部 侃 伊井 雅康
 (厚生連滑川病院・精神)
 永田 広幸 宮坂 貢 (同・放)

DSM-IIIに基づく13名のアルコール依存症患者にIMP-SPECTを施行し、以下の知見を得た。初期像で帯状回を含む前頭葉内側領域に限局した低集積が認められ、血流を反映するHM-PAO像とも一致したことから、この領域は慢性的な血流低下状態にあると思われた。他方、アルコール乱用で所見は見られず、分裂性障害やアルツハイマー型痴呆では内側領域に加え、外側領域においても低集積を示した。晩期像での著しいIMPの洗いだしを考慮すると、内側領域の停滞能低下も示唆された。アルコール依存症に特徴的なこれらの所見は年齢依存的であり、長期間断酒後にも認められた。さらに可逆的なアルコール性萎縮のみで所見を説明することには困難があり、むしろ健常高齢者の画像と類似していた。

14. ^{99m}Tc-MAA 肺血流シンチグラフィによる小児気管・気管支異物症の評価

伊藤 茂樹 大島 統男 深津 博
 伊藤 健吾 佐久間貞行 (名古屋大・放)
 松原 一仁 (公立陶生病院・放)
 因田 祥子 (同・小児)

小児気管支異物症(4症例6部位)の^{99m}Tc-MAAによる肺血流 scintigraphy(以下肺シンチ)の所見について検討した。異物による気道狭窄の診断は、胸部単純写真では確診2部位、疑診3部位、困難1部位で、肺シンチでは、確診5部位、疑診1部位であり、肺シンチの方が診断がより容易であった。かつ、肺シンチでの血流低下部位から肺葉気管支レベルで異物の介在部位の推測が可能と思われた。異物摘出後、胸部単純写真は1週間以内にほぼ正常化した。同時期の肺シンチでは血流低下の残存を認めた。この異常所見は、異物誤嚥後の気道の炎症性変化をより鋭敏に反映していると考えられ、十分なfollow upが必要と思われた。

15. 二光子吸収法を用いた種々の運動選手における骨塩定量

瀬戸 幹人 利波 紀久 南部 一郎
 中嶋 憲一 道岸 隆敏 久田 欣一
 (金沢大・核)
 高山 輝彦 (同・医短・放)

中年期以後の骨塩量減少率に著明な差がないとするならば、青年期の最高時の骨塩量の高低が老年期における骨粗鬆症発現に影響すると言われる。われわれは二光子骨塩定量分析装置 DBD-2600(ノーランド社製)を用いて20歳前後の正常ボランティア男女の腰椎骨塩量を測定し、幼少時からの生活習慣(食習慣、飲酒、既往歴、日光に当たる頻度、スポーツ歴、学習時間等)との関連を検討した。結果は骨塩量と生活習慣に明確な傾向を見いだすことは困難であったが、現役ラグビー選手ではL2-4の平均が全例で1.4 g/cm³以上で有意な高値を示した。これはラグビーでは骨密度を増加させる要因(運動の激しさ、日光への暴露、栄養)が顕著であるためと推察される。

16. DPA法による血液透析患者の全身骨塩量の測定(第2報)——血中PTH濃度および局所骨密度との比較——

瀬戸 光 渡辺 直人 萬葉 泰久
 征矢 敏雄 中嶋 愛子 亀井 哲也
 二谷 立介 柿下 正雄 (富山医薬大・放)

20~49歳までの男性で血液透析を受けている27名の患者をPTH-intact濃度正常群(n=13)および異常群(n=14)に分けて、健常対照群(n=18)と全身骨塩量および局所骨密度(頭部、胸部、骨盤部、上肢、下肢、腰椎)について比較を行った。全身骨塩量指標は両群とも有意に低値を示し、二次性副甲状腺機能亢進症で著明であった。局所骨密度はPTH正常群では対照群に比べて有意差を認めないが、異常群では、いずれの部位の骨密度も有意に低値を認めた。減少率では胸部が最も著明であった。PTH正常群で全身骨塩量指標低下が認められたが、カルシウムの利用障害と日常生活の運動制限に起因すると考えられた。